

ANNA AND SIMEON

アンナとシメオン

第5号

創立50周年記念号

この私に「向こう岸に渡ろう」と
語りかけてくださる方

1975年7月 榎本保郎

アシュラム
ASHRAM



シメオン黙想の家

住所／滋賀県近江八幡市土田町1191

シメオン黙想の家へのアクセス

《公共交通機関をご利用の場合》

JR琵琶湖線「近江八幡駅」北口、
バスのりばより 近江鉄道バス 長命寺線 長命寺行
「小幡上筋バス停」(6区間、5分)より徒歩10分

《お車で越しの場合》

名神高速道路「竜王I.C.」より車で20分

お問い合わせ先

アシュラムセンター

〒523-0894 近江八幡市中村町567-2

TEL.0748-33-4030 FAX.0748-33-8856

メールアドレス contact@ashramcenter.jp

ホームページ <https://www.ashramcenter.jp>



編集後記

本誌は今年で5年の歩みを重ね、私もアシュラムセンターも創立50周年を迎えました。創立者榎本保郎牧師が「向こう岸に渡ろう」という主イエスの言葉に突き動かされ、ここ近江八幡の地に拠点を定めたことを憶え、表紙には対岸を望む琵琶湖を配しました。さらにヴォーリス氏来日120年の節目にあたり、ヴォーリス記念館館長藪秀実氏との貴重な対談も実現。先人の志と歩みを胸に、私たちは次の50年を見据え、この建物と共に新たな歴史を刻んでまいります。皆様に感謝のご報告ができることを幸いに思います。

アンナとシメオン 第5号

発行日 2025年11月1日

発行者 アシュラムセンター

編集長 榎本 恵

副編集長 榎本 光太

編集 榎戸 基、榎戸 真弓

デザイン 阿久田 孝司 (DESIGN COLLECTIVE)

写真 榎本 光太、榎戸 基



ウィリアム・メレル・ヴォーリスと満喜子夫人

80年、100年の歴史が積み重なって「ヴォーリス建築」と呼ばれるようになる。つまり、建物を支えてきた人たちが、そして神様こそがその中身を形づくっているんです。

「外見よりも内容」 ——言葉の深み

藪館長 ヴォーリスさんの言葉に「建物の風格は人間の人格と同じく、その外見よりもむしろ内容にある」というのがあります。最初は「スペックがええんや」と思っていましたけど、もっと深い意味があるんです。建物を建てるときは、施主や信徒の思いがあつて初めて成り立ちます。そこに80年、100年の歴史が積み重なって「ヴォーリス建築」と呼ばれるようになる。つまり、建物を支えてきた人たちが、そして神様こそがその中身を形づくっているんです。

倫理ではなく、豊かさへ

榎本牧師 ヴォーリス先生というところ、禁欲的、堅苦しいというイメージを持たれる方もいます。でも実際は違うように思います。

藪館長 その通りです。『我が家の設計』『我が家の設備』には、こんな音楽を聴いたらいい、8時間寝なさい、日曜日は教会へ行きなさいといった生活の知恵が書かれています。設計だけでなく、豊かな人生そのものを考えていた。豊かに生きることが神の栄光を現すことにつながるという発想だったと思います。

受託者として生きる

榎本牧師 全てが預かりものという考え方ですね。財産や建物だけでなく、自分自身の肉体も神様から預かっている。だからこそ、それを大切にすることが隣人を愛するという精神につながる。ヴォーリス建築を守り、受け継ぐ人たちも同じ思いであると思います。

藪館長 まったく、その通りですね。

実践としての「神の国」

榎本牧師 ヴォーリスさんは、神の国がこの地上に来たりますようにと本気



アシュラムセンター
主幹牧師
榎本 恵

対談

ヴォーリス 記念館
館長
藪 秀実

ヴォーリス精神と歩む
50年と120年が重なる場所
節目の対話——50年と120年
アシュラムセンター50年、ヴォーリス来日120年。榎本恵牧師は創設の原点を語る。「近江兄弟社さんの社長さんの家がちょうどその時に売りに出ていまして、そこを父（榎本保郎牧師）たちが買ってアシュラムセンターが始まったんです。」

2025年8月27日
ヴォーリス記念館にて

信仰が宿る建築

藪館長 アシュラムセンターさんの施設はヴォーリス建築が用いられている例が非常に多いんです。旧佐藤久勝邸（シメオン黙想の家）など、フアンの憧れの建物ですよ。

榎本牧師 池田町洋館街のダブルハウス（旧近江ミツシヨンの社員住宅）には、私どもが住まわせていただいております。

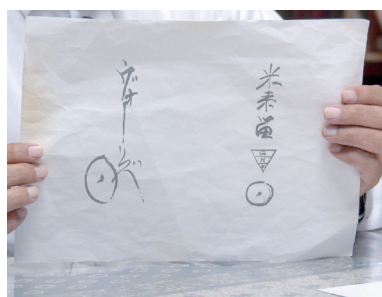
土田町で重なる志

榎本牧師 土田町（シメオン黙想の家がある町）に賀川豊彦先生の農民福音学校があつたという記述を見つけました。あのあたりには近江兄弟社の関係の方が多くお住まいで、ヴォーリス先

で折り、実践された方です。この近江八幡に病院や学校、事業、信仰共同体を次々と生み出していった。その志に感動して関東から移住した方々もいたと聞いています。

サインに刻まれた信仰告白

藪館長 ヴォーリスさんはサインの後に丸ちよんを付けて「Omihachiman is the center of the world.」——「近江八幡が世界の中心」という印を残しました。もちろん地理的な意味ではなく、神が共にいるこの場所が自分にとっての世界の中心という信仰なんです。さらに帰化の際には、ミドルネームの「メレル」を「米来留」と書き、三角形に「G.N.S.—God(神)・Neighbor(隣人)・Self(自分)」を刻みました。「まず神、次に隣人、最後に自分」。それが彼の信仰告白です。



ヴォーリス直筆のサイン

生も農村の人たちに福音を伝えていこうという思いを持っておられたのではないかと感じます。私たちの活動とも重なってくる部分がありますね。

アシュラムの源流

榎本牧師 アシュラム運動はスタンレー・ジョーンズ先生が始めたのですが、古い「湖畔の声」に、なんとジョーンズ先生がこの近江兄弟社に来て講演されたという記録があるんです。私たちの50年だけでなく、もっと前から

いま、ここが「世界の中心」

榎本牧師 日本を愛してくれたアメリカ人が、自分を一番小さくして神様を大きくし、その間に隣人を置く、その姿勢は、今の時代にも通じると思います。「あなたの立つ場所があなたにとっての世界の中心だ」という言葉に励まされます。これからのその思いを持って歩みたいと思います。今後ともよろしく願っています。

藪館長 ありがとうございます。



Hidemi Yabu
藪 秀実

公益財団法人近江兄弟社 常務理事
ヴォーリス記念館館長として、
建築と信仰の歴史を伝える活動を行う。

Megumi Enomoto
榎本 恵

宗教法人アシュラムセンター 主幹牧師
創立者の志を受け継ぎ、日本各地や海外で
クリスチャン・アシュラム運動を広めている。



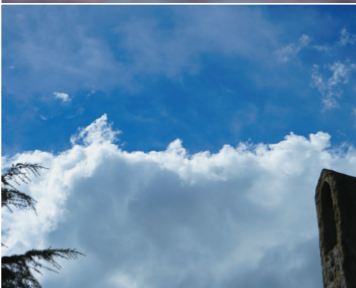
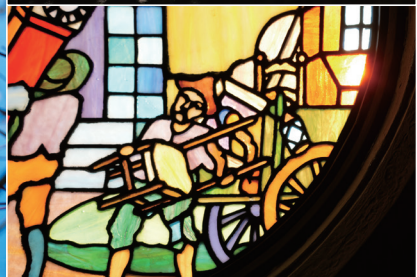
紙面の都合上、内容を省略して掲載しています。対談のすべてを動画でご覧いただけます。
<https://www.ashramcenter.jp/newsletter/anna-and-simeon/>

写真で見る

黙	シ
想	メ
の	オ
家	ン

静寂の中で持つ、神との対話

祈るひとびとのコイノニア





この言葉は、フランスの画家ポール・ゴーギャンがタヒチで描いた大作の題名です。

その絵には、幼子、若者、働く人々、そして死を迎える老人まで、人の一生が象徴的に描かれています。

孤独と絶望のただ中で、ゴーギャンは人間存在の根源を問い直し、作品にその問いを託しました。

この問いは、私たちアシュラムセンターの50年の歩みとも静かに響き合います。

今から50年前の1975年9月、アシュラムセンター創設者、榎本保郎牧師は主イエスの「向こう岸に渡ろう」（マルコ4：35）というみ言葉を神の招きとして受け、まさに向こう岸を渡るように、瀬戸内海の向こう、四国今治から近江八幡の地に移り住みました。

祈りと御言葉に聴従する運動が、そこで始まったのです。安住の岸边にとどまることなく、未知の岸へと漕ぎ出す——そこには、信仰による決断がありました。

残念ながら、保郎牧師はわずか2年足らずで天へと帰り、指導者を失ったアシュラムの友たちは途方に暮れました。しかし、その先達たちもまた、神のみ言葉に耳を傾け、歩みを止めることなく、今日までつないできたのです。

そして今、半世紀の歩みを経て、アシュラム運動は日本各地に広がり、台湾やブラジルにもその輪を広げています。

今年、50年の節目にあたり、私たちは新たに自らに問いかけます。「私たちはどこに向かうのか」と。

その問いの中で、私は主イエスの訣別の言葉に耳を澄ませます。「わたしは平和を、あなたたちに平和を残し、わたしの平和を与える。

わたしはこれを世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」（ヨハネ14：27）

世界では今、愛が冷え切ったように「自国ファースト」が叫ばれ、「私のものは私のもの」とする独善的な声が強まっています。

しかし聖書は、まったく異なるビジョンを私たちに示します。「50年目の年を聖別し、全住民に開放の宣言をする」（レビ記25：10）ヨベルの年を告げるのです。

この年には、土地が元の所有者に返され、奴隷は解放されます。なぜなら、すべては人の所有ではなく、神のものであるからです。

分断と暴力、自国中心主義の波に揺れる世界。人々は「全ては自分たちのもの」と叫び、他を排除しようとします。

力による均衡こそが平和であると声高に主張します。しかし、聖書が告げるヨベルの年——

「すべては神のものである」という真理に立つとき、初めて、世が与えるのではない、主の平和が開かれるのです。

50周年を迎えた今、私たちはこのヨベルの年の精神に立ち返ります。

私たちはどこから来たのか。私たちは何者か。

そして、私たちはどこへ行くのか。今一度、み言葉に耳を傾け、祈り、従う者として、「この世のすべては神のもの」という神の平和を証ししながら、次の向こう岸へと漕ぎ出すのです。

さあ、ヨベルの年——

角笛を吹き鳴らし、

新たな一歩を踏み出しましょう。



アシュラムセンター 主幹牧師
榎本 恵

アシュラムセンター 50周年を迎えて

私たちはどこから来たのか。
私たちは何者か。
私たちはどこへ行くのか。

ポール・ゴーギャン



公益財団法人近江兄弟社（ヴォーリス記念館）

〒523-0841 近江八幡市慈恩寺町元11 TEL.0748-32-2456

- 入館時間／10:00～16:00（要電話予約）
- 休館日／月曜日、祝日、その他不定休 ※12/1～翌年1/15まで展示入替のため休館
- 入館料／500円（高校生以下は無料）
- アクセス／近江八幡駅から近江鉄道バス鍛冶屋町下車、徒歩で約3分

祈りつゝ前進、
受け継がれる信仰

の雰囲気をもそのまま残した室内は、ヴォーリス夫妻の人物を伝える貴重な空間となっている。建物は当初、幼稚園の教員寮として計画されたが、建築中に夫妻の自宅とすることが決まったというエピソードもあるそうだ。

ヴォーリスが近江八幡に築いた建築物群の中でも、彼の人生の集大成ともいえるこの記念館は、彼の精神と功績を今に伝える貴重な場所として多くの人々に親しまれている。建物の保存活動も行われ、次世代へとその歴史を語り継ぐ努力が続けられる。

慈恩寺町のヴォーリス記念館から徒歩で20分、土田町にあるアシラムセンターの修養施設「シメオン黙想の家」（旧佐藤久勝邸）はヴォーリスの弟子である佐藤久勝の家として建てられたものだ。両施設は近江八幡におけるヴォーリス建築の系譜を物語っている。

ヴォーリスが近江八幡で展開したキリスト教伝道と社会活動の精神が、弟子の佐藤久勝や、アシラム運動を日本に広めた榎本保郎牧師といった後世の人々へと受け継がれ、今に伝えられていることを象徴していると言える。



ヴォーリス記念館
《滋賀県指定文化財》

一 階建ての洋風建築で、赤い瓦屋根と白い煙突が特徴的な外観を持ち、瀟洒な雰囲気漂わせている。ヴォーリス自身が設計し、1931年（昭和6年）に完成。ヴォーリスの生涯と功績を伝える重要な文化財として、滋賀県指定有形文化財にも登録されている。

ヴォーリスは、1905年（明治38年）にキリスト教の伝道と英語教師として来日し、近江八幡に赴任。布教活動のために建築事務所を設立し、生涯で約1,600件もの建築物を設計。西洋のデザインを取り入れつつ、日本の風土や生活様式に合わせた独創的なスタイルが特徴。ヴォーリス記念館も、彼のそうした建築思想が反映された建物であり、随所に繊細な配慮が見られる。

記念館では、ヴォーリスの生涯や、近江兄弟社の創設、病院や学校の建設といった社会事業に関する資料、また夫妻の愛用品などが展示されており、生活空間

アシラムセンターと

ゆかりのある場所を紹介していきます。

たびんちゅ牧師、東へ西へ

Vol.5

● こどもアシュラム

第1回となるこどものアシュラムが1泊2日で開催されました。2歳から小学2年生までのこども達が遊びや歌、工作を通して感性を育み、また神さまの愛に触れました。有志の方々のご奉仕にも感謝。



● 読書会

榎本空氏の著書「音盤の来歴」を、レコードの音に耳を澄ませながら味わい、著者本人から秘話や込められた思いを伺い、それぞれの音盤の来歴を語りました。

● ランチ会

京都伏見『みんなのカフェちいろば』の大山シェフ監修の元、クリスマスと春のランチ会が持たれました。シメオン黙想の家の見学と合わせて豪華なコース料理を堪能しました。



● 遠国からの来訪者

今年は多彩な国籍の方々がお越しく下さいました。ブラジルからの伝道旅行、台湾から桜の季節のアシュラムに、そして人道支援の最中ポーランドからの訪れ。ここが平和の交わる場所となることを願います。

● ヴォーリス建築見学会

月に一回の見学会は毎回大盛況。「かわいい」や「住みたい」という声を多くいただき感謝いたします。参加者の好奇心あふれる熱心な眼差しに触れ、この建物を守り継ぐ意思を新たにしました。



支援のお願い

私たちは、シメオン黙想の家、アンナ祈りの家、これらを拠点として誰もが集える共同体を形成し、ヴォーリス建築の保存活用を進めていきます。そのためには、建物の維持管理、購入費の返済、また今後の活動に多くの費用を必要とします。上述の共同体構想に共鳴し、積極的にご協力、ご支援、ご奉仕いただける方を会員という形で募集します。金銭的なご支援だけでなく、建物や敷地の清掃

などのご奉仕、アシュラム集会へのご参加をいただけると幸いです。

ご協力いただいた方には、毎年本誌をお送りし、近況報告やヴォーリス建築などについてお伝えしていきます。また現在は、シメオン黙想はアシュラム集会等の利用に限定していますが、今後見学や宿泊を可能にしていき、ヴォーリス建築の魅力を伝えていきたいと思っています。

オンライン献金ができるようになりました。QRコードを読み取ってください。



信仰刷新の息吹 ― アシュラム運動の霊的系譜

忙しい毎日の中で、たとえわずかな時間でも、自分と静かに向き合うひとときを持てるなら、何と幸いなことであろう。朝のひととき―それがたとえ十五分であっても―日常が変わることがある。何ものにも囚われず、静かな思いで過ごす習慣が身につくなら、それこそ最上の恵みである。

キリスト教の流れの一つに、このような志向性をもつ「アシュラム」という運動がある。アシュラムでは、朝ごとに、生ける主イエス・キリストを通して御父の愛を受け取る。神が聖書を通して今、自分に何を語っておられるのかを聴き取ろうとする人々は、この「み声のひととき」に深い喜びを見いだす。そして、み言葉に日ごと養われ、福音に生かされる生活へと導かれていくのである。

しかし、まさにそのような恵まれた時にこそ、人は問われる。「自分は本当に何を信じているのか」と。信仰に向き合う静かな試みは、いつも新しい出発点となる。

1975年、滋賀県近江八幡に設立されたアシュラムセンター（宗教法人）は、五十年の歩みを経て、今やキリスト教超教派の祈りの場として、その存在意義をいっそう深めている。祈りとみ言葉に聴く超教派の黙想運動は、現代社会にあてます必要とされる信仰の姿勢である。

なぜなら、信仰がしばしば「習慣」と化し、形式の中で生きるだけのキリスト者の世界に陥る危険

があるからである。そのような状況への懐疑と問いかけこそ、常に教会の中に息づくべき改革の精神であろう。宗教改革のルター以来、プロテスタントの歴史は、つねに信仰の刷新を求める霊のうねりによって動かされてきた。

十七世紀のドイツに、第二のルターとも呼ばれた神学者がいた。敬虔主義（ピエティズム）の父、フィリップ・ヤーコブ・シュベナー（1635-1705）である。彼が唱えた信仰覚醒の運動は、ルター派教会に新しい息吹を与え、個人の信仰生活の内的深化を促した。

この敬虔主義の流れは、単なる一時的改革ではなく、十八世紀以降も脈々と受け継がれ、やがてアメリカや世界各地における信仰改新の潮流となっていく。理性よりも「心の信仰（heart religion）」を重んじるこの運動は、神のみ言葉に聴き従うという点で、まさにアシュラムの精神と深く響き合うものである。

アシュラム運動とは、何世紀もの歴史を超えて、世界の諸教会の中に流れ続ける「信仰の改新の息吹」である。この運動がいかにして形成され、いかにして今日、私たちの祈りと生活に新しい光を投げかけているかを証しするものである。

京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授
河崎 靖